

日蓮大聖人御書全集

しいじのしろうどのごしよ

椎地四郎殿御書

新版
1720
ゝ
1721

しいじのしろうどのごしよ

椎地四郎殿御書

しいじのしろう

椎地四郎

せんじつおんものがたり

こと

か

ひと

かた

あいたず

そうら

先日御物語の事について彼の人の方へ相尋ね候いしと

おお

そうら

すこ

違

そうら

ころ、仰せ候いしがごとく少しもちがわず候いき。これ

励

ほけきよう

くどく

えたも

につけても、いよいよはげまして法華經の功德を得給うべ

しこう

みみ

りろう

まなこ

き

み

たま

し。師曠が耳・離婁が眼のように聞き見させ給え。

まつぼう

ほけきよう

ぎようじやかなら

しゅつたい

だいなんきた

末法には法華經の行者必ず出来すべし。ただし、大難来

まうじよう

しんじん

よろこ

ひ

たきざ

りなば、強盛の信心いよいよ悦びをなすべし。火に薪を

加

盛

たいかい

しゆるい

くわえんに、さかんなることなかるべしや。大海へ衆流入る。

たいかい かわ みず かえ

ほつきたいかい ぎようじゃ

されども、大海は河の水を返すことありや。法華大海の行者

しよが みず だいなん

返

答

に諸河の水は大難のごとく入れども、かえすこと、とがむる

しよが みずい

たいかい

だい

ことなし。諸河の水入ることなくば、大海あるべからず。大

なん ほけきよう ぎようじゃ

てんだい

しゆる うみ

難なくば、法華經の行者にはあらじ。天台云わく「衆流、海

い たきぎ ひ さか とううんぬん

に入り、薪、火を熾んにす」等云々。

ほけきよう ほうもん いちもんいつく ひと 語

語

かこ

法華經の法門を一文一句なりとも人にかたらんは、過去の

しゆくえん 思 きよう い しょうほう き

宿縁ふかしとおぼしめすべし。經に云わく「また正法を聞

ひと ど がた うんぬん もん こころ

かず、かくのごとき人は度し難し」云々。この文の意は、

しょうほう ほけきよう きよう 聞 ひと ど

正法とは法華經なり、この經をきかざる人は度しがたし

もん
という文なり。

ほっしほん

ぜんなんし

ぜんによにんないしすなわ

によらい

つか

法師品には「もしこの善男子・善女人乃至則ち如来の使

と

たま

そう

ぞく

あま

おんな

いづく

ひと

いなり」と説かせ給いて、僧も俗も、尼も女も、一句をも人

語

ひと

によらい

つか

み

きへん

ぞく

にかたらん人は如来の使いと見えたり。貴辺すでに俗なり、

ぜんなんし

ひと

きよう

いちもんいづく

ちようもん

善男子の人なるべし。この経を一文一句なりとも聴聞して

たましい

染

ひと

しょうじ

たいかい

わた

ふね

神にそめん人は、生死の大海を渡るべき船なるべし。

みようらくだいしい

いづく

たましい

そ

ひがん

妙楽大師云わく「二句も神に染めぬれば、ことごとく彼岸

たす

しゆい

しゆじゆう

なが

しゆうこう

ゆう

うんぬん

しやうじ

を資く。思惟・修習すれば、永く舟航に用たり」云々。生死

たいかい

わた

みようほうれんげきよう

ふね

叶

の大海を渡らんことは、妙法蓮華経の船にあらずんば、かな

うべからず。

ほけきよう

によととくせん

わた

ふね

え

そもそも、法華經の「如渡得船（渡りに船を得たるがご

ふね

もう

きようしゅ

だいかくせそん

ぎようちむへん

とし」の船と申すことは、教主・大覺世尊、巧智無辺の

ばんしよう

しみはつきよう

ざいもく

と

あつ

しようじきしやごん

番匠として、四味八教の材木を取り集め、正直捨権と

削

じやしいういちによ

切

あ

だいごいちじつ

釘

けずりなして邪正一如ときり合わせ、醍醐一実のくぎを

ちよう

打

しようじ

たいかい

押

浮

ちゆうどういちじつ

丁とうつて、生死の大海へおしうかべ、中道一実の

帆

柱

かいによさんぜん

ほ

揚

しよほうじつそう

追

風

得

ほばしらに、界如三千の帆をあげて、諸法実相のおいてをえ

いしんとくにゆう

いつさいしゆじよう

と

乗

しやかによらい

舵

て、以信得入の一切衆生を取りのせて、釈迦如来はかじを

と

たほうによらい

綱

手

と

たま

じようぎようとう

しぼさつ

取り、多宝如来はつなでを取り給えば、上行等の四菩薩は

かんがいそうおう

漕 たも

ふね

によとくせん

函蓋相応してきりきりとこぎ給うところの船を、「如渡得船」

ふね もう

の船とは申すなり。

乗

もの

にちれん

でしだんなとう

よ

よ

しん

これにのるべき者は、日蓮が弟子檀那等なり。能く能く信

たま

じさせ給え。

しじようきんごどの

げんざんそうら

よ

よ

かた

たま

そうら

くわ

四条金吾殿に見参候わば、能く能く語り給い候え。委し

もう

そうろう

きようきようきんげん

くは、またまた申すべく候。恐々謹言。

しがつにじゅうはちにち

にちれん

かおう

四月二十八日

日蓮

花押

しいじのしろうどの

椎地四郎殿へ